



FORUM 1

13:40～14:00

N. RESCUE 国際救助隊がつなげる未来！

木村 政司 芸術学部・教授(研究代表者)

平成25年5月にこの研究が学長指定研究として採択、直ちにホームページを制作し日本大学 N.RESCUE 国際救助隊の目的・使命・計画を掲げ、「災害復興支援」「医療福祉支援」「教育支援」という3つの研究テーマで共同研究者の企画案を元に64の支援コンテンツを策定した。そして、フェイスブックによるプロジェクトの‘見える化’と研究者同士の情報共有、及び研究活動の理解推進基地をつくった。

①被災地や遠隔地での円滑な支援活動を実現するための「スマートモビリティシステム」の開発と運用、②全国に展開する校友や付属校を活用した社会還元プロジェクトの実施、③平時の小中高生への最先端科学技術を中心とした教育支援活動、を目標に掲げ N.RESCUE のブランディングを行ない、エヌドットとの共同体としてのイメージ構築を行なった。

そして、この研究の未来像とプロジェクトポリシーを分かりやすく印象深いものにするため、シンボル性と想起性が高く、長く親しまれるイメージをデザインした。これを繰り返し展開・運用することでこの研究プロジェクトのブランド価値を高める効果を狙った。

また、地域への知名度を高めるために全国の教員向け科学教育情報誌『教育応援』に特集記事を掲載し、全64の支援コンテンツを付録ポスター付きで全国約5,100校の高等学校と中学校に7万部配布したことで、青森、岩手、福島、兵庫、大阪他の中学・高等学校から教育支援の出動依頼があった。2014-2015版『大学の約束』では、今までの大学の枠を大きく超えるチャレンジであると評価され掲載された。

国際救助隊という名称には、事故や災害があったら現地に向かい救助に全力を尽くすといったイメージがある。しかし、我々は世界の舞台で社会に貢献できる人材を『国際救助隊』と呼ぶことにした。

主役は大学の研究者、教職員、学生であり、一般の人々や地域社会である。大学の研究成果を地域や社会に飛び出し、移動教室や実験教室、ワークショップといった社会実験を繰り返すことで、社会還元する救助隊である。言葉を変えて言うなら、大学の「知」の面白さや好奇心を、一般の人々の目線で伝え運用できる「スマートモビリティシステム」を構築することを目的とした。

この国際救助隊は、「災害復興支援」「医療福祉支援」「教育支援」という3つの柱で構成され、各々の魅力的なプログラムコンテンツを地域社会に支援することで、世界の舞台で活躍できる人材を育成することにコミットした研究プロジェクトである。

大学の研究というと発明・発見につながる新しい研究や先端的研究のイメージがあるが、このプロジェクトは文系・理系にとらわれることなく日本大学のあらゆる「知」のつながりを結集し、大学の様々な研究を探求することから始めた。つまり、学部を問わず研究コンテンツをコレクションし、それらが横につながる可能性を見極める研究コーディネーターという仕事が研究代表者としての役割だった。

日本大学のように各学部が離れた場所にある総合大学では、学部、学科、研究をつなげ、研究者、学生をつなげ、校友、付属高校、大学をつなげ、一般と大学をつなげる機能をコーディネートする人材が必要である。そして、そこに創造的で魅力ある大学のブランディング戦略が構築されれば、強い求心力を生むことができるはずであると考えた。これは同時にコーディネーターとしてのセンスが試されるものであることは分かっていた。

各学部距離があることをフルメリットに変え、校友会やOB、OGが経営する企業、全国に数多く点在している付属高校や小中学校と連携し、地域の活性化や災害復興、防災に結びつく新しいモビリティ環境を継続的につくりあげることを目指した。そして、こうした社会実験を繰り返し続けることは、大学の「研究成果の社会還元」と「国際社会で活躍できる自主創造型パーソンの人材育成」を可能にするパワーを創造する源泉になると考えた。

日本大学の「知」がフルに活かせる「災害復興支援」「医療福祉支援」「教育支援」の3つの支援には、共同研究者20名が創り出した64のコンテンツの多様性と共通性があり、知的好奇心を駆り立てるキーワードが盛り込まれたものだった。

この研究プロジェクトのもうひとつの核となる学生の育成ができる新しい仕組みを作るためには、遠隔地で社会実験ができる大型の「スマートモビリティシステム(SMS)」を開発し、支援コンテンツを実践する国際救助隊を大学のシステムとして稼働させることだった。

当初提案したスマートモビリティシステムは、災害時の救助や復旧支援のための装置や、医療支援、教育支援のための機材を搭載して被災地や遠隔地の赴き、現地で迅速な活動ができるよう荷台部分を改良した大型トラックと、それを合理的に運用するための管制システムを含めた総称だった。

しかし、見えない部分の「スマートモビリティシステム」の本質は、大学の目的である教育・研究の成果としての「知」を動かすシステムのことである。モビリティという本来の意味の普及も含まれているが、「知」を動かすということは、研究者や学生、民間レベルのネットワークのような見えない力も含め、機能性や移動性を持った創造的な機動力のことを言う。「モビリティ」というキーワードは、見栄えや形よりも人々のホープやスピリットに支えられるところが大きい。大学の「知」で地域や社会の「地」に貢献し、つなげる役割を果たすことで本来のモビリティという意味が活きるのである。

N.RESCUE 国際救助隊の存在とシステムを如何に社会に知らせ、明確な役割をもって社会問題の解決と支援・貢献ができるかということは大事なミッションのひとつだった。問題だったのは、各学部の研究や研究者によって関わり方が難しいものもあり、当然それはその学部の学生にも反映していた。認知度が上がると参加したい教職員や学生が増加することは分かっていたが、それ以上に重要だったのは、このシステムが日本大学すべての教職員と学生にとって欠かせない存在となることだった。人々の心を動かす存在になることであった。



SMC-1 (スマートモビリティクラフト1号) 連携協力: 五光物流株式会社

災害があつたらどうするかではなく、災害国日本の安心・安全を確保するための考え方を、大学のシステムとして未来につなげていくことが重要であると感じた。ここで言うシステムを活かすのは人の絆であり、学生と大学の絆であり、大学と地域社会の絆である。支援するということは、その場を改善するために何でもかんでも提供するのではなく、信頼関係を築くための対話や議論を誘発し、共感と共有のコミュニケーションを作り出すことを意味している。

これまで日本国内にとどめて社会実験を行ってきたが、将来はアジアの国々に支援できるシステムを構築したいというのが、我々の目標であり夢である。アジアの国々にはまだまだ生きるために苦悩し、食料や水もなく毎日のように感染症に倒れる子どもたちがいる。個人の医師や団体組織のサポートシステム、各国のレスキュー隊が支援している災害に、大学という教育・研究機関は何をするべきか、何ができるのかを考えることはそう突飛陽子のないことではなくなってきた。

これからの日本にとって「防災」という最重要問題を考えるために、あらゆる交通イノベーションの可能性や宇宙に向かうための安心安全な技術、ロボットと人間の関係の未来、人間の限らない情熱と夢を持続させるために大学の「知」は限りなく支援できることが分かった。そして、前例に縛られることのないモビリティの高い社会を創造できる人材を育てることが、日本の安心・安全の未来をつくり、大学の「知」で地域や社会の「地」に貢献できるのではないかと考える。

この研究プロジェクトは、リスクに対して正しい反応ができるように、大学の「知」に共感することで共有できるコミュニケーションや会話を提供するために走り続けるモビリティシステムを開発したものである。大学の教育と研究を幅広く還元し、そして支援を行うには見えない困難な壁はあるが、そこにブレイクスルーを起こさなければ何も変わらない。新しい発想で壁を乗り越える可能性は、地域一般の人々や子どもたちに向けたアウトリーチ活動を大切に、意義ある社会還元を行うことから生まれる。

特に「防災」の未来には、大学同士が「知」の絆をつくり、モビリティネットワークによって社会に貢献できる大学のあり方も継続的に考えていくべきではないだろうか。この社会実験として国際救助隊の誕生は、大学の機能としてあるべき活動とひとつの姿を目指した。詳しくは、近々リバネス出版から発売される日本大学学長特別研究編 『国際救助隊誕生』—N.RESCUE 国際救助隊誕生物語— を読んで頂ければ納得頂けると思う。

このリレーフォーラムでは、共同研究者たちが大学の外で実施した社会実験の研究成果や活動を報告することに留まらず、この国際救助隊がつなげていく日本大学の未来へのメッセージを多くの人に届けたいと考えている。そしてこの国際救助隊がつなげる未来は、日本大学が目指す自主創造型パーソンの人材育成の手本となることは間違いないだろう。

このプロジェクトが、日本大学を代表する学長特別研究として認めて頂き、2年間研究成果を見守って頂いたことに心より感謝申し上げますと共に、連携協力頂いた五光物流株式会社にも心より御礼申し上げます。また、国際救助隊を未来につなげるために応援して下さった全ての人々にも心より感謝申し上げます、 隊員として社会実験に貢献してくれた多くの学生諸君を心から讃えたい。